

4/19 (土) 高槻市立総合スポーツセンター

第1試合 京産大 vs 阪南大

第2節同様、強風が吹き荒れた高槻。2試合連続引き分けの阪南大にとって、早く勝ち星を挙げたいところだ。一方、第2節で4-0とびわこ大に快勝した京産大は、勢いに乗って連勝を狙う。この戦いも両者、風に苦しめられた。

試合開始早々、京産大はチャンスを活かし、調子の良いFW⑩小笠原侑生のクロスをしてDE⑮濱田太一が頭で合わせ先制点ゴール。その後は追加点をあげられず、後半へ折り返す。後半に入ると、「風下でのプレーができていない」(本並健治コーチ)とその言葉通り、風上に立った阪南大の逆襲が始まった。後半13分、コーナーキックの混戦から再三シュートを放つ。バウンドした球をGKがとり損ね、そこに詰めていたDF③野田紘史が決め、同点に追いつく。その後も右サイドのFW⑪木原正和を中心に、怒涛の攻撃を展開。幾度となく相手ゴールを脅かすも、試合終了までゴールネットを揺らすことはできなかった。

相手を追い詰めながらも勝ちきれない試合が続く阪南大。「点を獲って勝ちたい」(FW⑪木原正和)と、最大の課題はフィニッシュだろう。また後半苦戦を強いられた京産大は、次節の関西大戦へ向けチームの立て直しを図る。

(文:フリーライター 久住 真穂)

京産大 1 { 1-0 } 1 阪南大
 { 0-1 }

得点(アシスト)者
8分 濱田(小笠原)

得点(アシスト)者
58分 野田

第2試合 びわこ大 vs 立命大

びわこ大 3 { 3-0 } 1 立命大
 { 0-1 }

得点(アシスト)者
9分 瀬古(岡野)
40分 瀬古(平野)
41分 篠部(平野)

得点(アシスト)者
85分 オウンゴール

この試合、前節京産大に大敗したびわこ大は攻撃陣が爆発。3-1と快勝を収めた。序盤、びわこ大に絶好のチャンスが訪れた。右サイドでファイルもらい、FKをゲット。MF⑱岡野雅俊があげたボールにMF⑨瀬古朋広がヘディングで決め、待望の先制点を奪う。この1点がチームの原動力となり、「今日は守備の意識から入った」(MF②船津徹也主将)と感じさせない積極的な攻撃を仕掛ける。そして前半終了間際、果敢に攻めていた右サイドからのパスに合わせ瀬古が今日2点目を決めた。その直後には、こぼれ球をFW 25 篠部拓真がゴール。前半で3-0と立命大を大きく引き離れた。後半、なんとか追いつきたい立命大は、初出場のFW33佐原啓泰、新人のMF40加藤恒平を投入するも失点の代償は大きく、オウンゴールで一点を取っただけに留まった。

無得点に終わった立命大だが「攻撃の形を作っていくには時間がかかる。もっとサイドバックから縦に入る動き、パスをいれてレベルアップしていかないといけない。」(米田隆監督)と一年を通してのチーム作りを視野に入れている。一方、2アシストを決めたびわこ大・FW⑬平野甲斐は「応援の力が勝因」と応援する仲間たちへ感謝の気持ちを語った。声援を力に変え、二連勝を目指す。

(文:フリーライター 久住 真穂)

4/19 (土) 鶴見緑地球技場

第1試合 関学大 vs 同大

これまで2引き分けの関学大が初勝利。ロスタイムにゴール前のFKからFW⑩桑原透記が押し込んだ。関学大が前、後半を通じて、ゲームのイニシアティブを握りながら苦しんだのも、同大のDF陣がよく守った、というよりゴール前での「決定力不足」(関学大・加茂監督)から。

中盤は関学大が支配した。個々の技術をつなぐ意識に結びつけ、速さと鋭さもあり、同大を再三ピンチに押し込み、はやばやと得点してもおかしくなかった。同大は堅いグラウンドの影響もあったのか、MF⑩楠神順平を軸にしたスピードを持ったパスワーク、展開、左サイドからの攻撃も影をひそめ、チャンスをほとんどつくれなかった。

関学大にはいい若手が育っている。1年生トリオのセンターバック31津田真吾、FW26梶川諒太、28阿部浩之。津田は1年生とは思えぬ冷静な戦局判断力でDF陣をリードし、梶川、阿部は攻撃の軸になっている。特に阿部は速さと精力的な動きに加え、FK、CK、ゲームメイクと獅子奮迅の活躍で先行きが楽しみだ。

(文:関西学連)

関学大 1 { 0-0 } 0 同大
 { 1-0 }

得点(アシスト)者
89分 桑原(村井)

桃山大 0 { 0-0 } 2 大教大
 { 0-2 }

得点(アシスト)者
52分 田代(森原)
69分 森原(高垣)

3年前の1部昇格では勝てなかった(3分け6敗)大教大が、うれしい初白星。前節の関西大戦で一度は勝ち越すなど、好試合を演じたことが自信になっていたのだろうが、見事な勝利だった。

大教大は前半から、バランスよくつなぐ桃山大に「うちはまず守りから」(大教大・入口監督)を徹底しながら、全員が高いモチベーションを持続するサッカーで対抗した。それが桃山大のチャンスの芽を摘むことになった。セットプレーも桃山大の大きな得点源の一つ。前半だけで8回のCKも全て大教大はしのがれて「前半のチャンスを活かせなかったこと」(桃山大・松本監督)と、大きな悔いを残すことになった。

前半を耐えた大教大は、後半6分、左から攻め、関西大戦で2得点のFW⑨森原慎之佑のシュートこそはじかれたが、そのこぼれ球を、FW22佐藤和馬がフォローして先制。桃山大、FW⑩辻和帆が退場後の25分には、FW森原がダメ押しともいえる2点目を叩き込んで勝利を不動にした。桃山大はMF⑬渡部泰征、MF⑭宮澤龍二をケガで欠いて攻撃に厚みがなく、さらにチーム全体に積極性がなかったことも気になった。

(文:関西学連)

第2試合 桃山大 vs 大教大

4/20 (日) 鶴見緑地球技場

第1試合 関西大 vs 近畿大

試合序盤は、両チームが主導権を掴もうと中盤で激しくぶつかり合い、センターライン付近の攻防が続いた。その流れに風穴を開けたのが、関西大MF 21 大屋翼と左SB② 田中雄大。この日の大屋は、ポジションに囚われず空いているスペースに自由に飛び出し相手を攪乱した。その動きで、近畿大のサイドにスペースが生まれ始め、そこを田中が鋭い飛び出しで突いた。田中のクロスからチャンスを量産し始めた関西大の先制点は30分。田中が蹴ったCKを、ゴール前に上がっていたDF⑫平野史明が合わせた。守備の動きも安定していた関西大は、前半、近畿大に1本のシュートも許さなかった。

後半、追い付きたい近畿大は、「少しポジションを下げてゲームを作ろうとした」というMF⑩平原研からのパスでチャンスを作り出すが、関大GK 22 三橋博貴の攻守にも阻まれどうしてもゴールが割れない。「この試合の勝因は辛抱出来たこと」と関西大の川端秀和監督が語ったように、苦しい時間帯を凌いだ関西大が再びペースを取り戻す。後半36分には、再び平野がCKから得点し、試合を決定付けた。残り時間、試合を見事に、“静かに”終わらせた関西大が連勝を飾った。

(文:サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ)

関西大	2	$\left\{ \begin{array}{l} 1-0 \\ 1-0 \end{array} \right\}$	0	近畿大
-----	---	--	---	-----

得点(アシスト)者
30分 平野(田中)
81分 平野(大屋)

第2試合 大院大 vs 姫獨大

大院大	0	$\left\{ \begin{array}{l} 0-1 \\ 0-0 \end{array} \right\}$	1	姫獨大
-----	---	--	---	-----

得点(アシスト)者
35分 田中

試合を優勢に進めていたのは、間違いなく大院大だった。サイドの速さと中央の高さや強さを活かした力強いサッカーを展開。しかしこの日の姫獨大の守りは堅かった。姫獨大の昌子力監督や選手たちが異口同音に語った「リトリートの意識が統一されていて、その位置取りがしっかり出来ていた」ことがその要因。確かに、姫獨大は自陣に引いてスペースを消して守っていたが、下がり過ぎてピンチを招くようなことを避けるため、全体をコンパクトに保っていた。そして、もう一つの狙い、カウンター攻撃が決まったのが35分。長めのスルーパスに抜け出したFW⑱米澤謙がドリブルで持ち込み、思い切ってシュート。一度はGKに弾かれるが、空中に浮いたボールをMF 23 田中誠が押し込んで先制した。姫獨大の前半のシュートは、この一連の流れで発生した2本だけ。完全に狙いがはまったと言える。

試合はこの後も、攻める大院大、守る姫獨大の構図は変わらなかったが、スコアが動くことなく終了。この試合で印象的だったのは、姫獨大の11人が、仲間に対してコーチングをする声が90分間途絶えなかった事。サッカーの世界でよく言われる“喋る事の大切さ”を実践した姫獨大が、今季初勝利をもぎ取った。

(文:サッカーライター ハヤシ ヒロヒサ)